石原 豊子 選

特選

振り返る祖母がいたはず台所二月のあの日時が止まった

県立三原高等学校一年 浅海 花菜

下の句に祖母を偲ぶ強い気持ちを感じさせる。【評】祖母が亡くなったことを思わせる「二月のあの日時が止まった」の

核兵器どうしてあるの考えて君の今より僕らの未来

福山市立城北中学校一年 新田

晄

鐘を鳴らしている歌である。 【評】核兵器をちらつかせる不安な報に、「君の今より僕らの未来」にと警

鏡にはうらの自分をかくせずにぼくを見ている鏡のぼくが

庄原市立高野小学校五年 馬舩 清太

でも写しているかのよう。悩み多いこの時期の思い。【評】思春期によく見るであろう鏡。その鏡は姿形だけでなく、心の中ま

放課後の楽器演奏にじむ汗ふと上見やれば雲の峰立つ

県立千代田高等学校二年 郷田 ひな

立つ」の結句の表現が効いている。【評】放課後の音楽クラブの練習中、ふと窓外を見れば積乱雲が。「雲の峰

「先輩」と呼び止められてゆっくりと嬉しさ隠して振り向く私

広島市立井口中学校二年 福田

真夕

輩」として見せる心の余裕を感じさせる歌。【評】三句と四句の「ゆっくりと嬉しさ隠して」の表現に、「後輩」に「先

亡き祖母や葬式終わり次の朝祖母を想って零れる涙 福山市立松永中学校三年

閉じられる学校最後の卒業生私一人が送られて行く

庄原市立庄原中学校二年

土居

穂香

岡田

盆

の夜に返事は来ないと知りつつも亡き祖母思ひ声をかけけり 清水

卒業式明日も食べたいたまご焼きこれが最後の母の弁当

わすれない伝え続けてこれからも残し続ける原爆ドーム

松本

修己

福山市立城北中学校三年 前原

朝が来てご飯を食べてまた眠る平和なことに気づかない今 忘れるな八月六日の広島忌知らなくなりゆく本当の怖さ

富士谷咲奈

県立尾道北高等学校一年 岡野

七ミが鳴くあの日の悲惨さ思い出す被爆アオギリ真実を知る

藤 并 W

n

向島も尾道も平和ウクライナに住んでる子たちの毎日を思う 日の楽しいくらしのありがたさ思い知らされるウクライナ十の都市 大倉

尾道市立向東小学校五年 佐藤 翔

12

蝉声が耳に響いた帰り道どこか懐かし真夏のにおサヒセサル

広島市立戸山中学校二年 桑田 晄良

] ス前心拍数が上がってく笛の合図で飛び込む一瞬

田中

千陽

緊張で手に汗握る試合前勝ちにこだわる自分のステージ

早朝 に海面で光る小鰯の白銀 の腹身を隠す 県立広島皆実高等学校

県立三原高等学校 一年 仁田 想己

年

坂本

華蓮

さっそうとえさを運ぶよ親ツバメ日増しにふくらむ五羽の子ツバメ

笠岡

けも の道囲む自然の葉も落ちて秋の終わりを告げる木々 福山市立城北中学校三年

オレンジにそまりし海をながめつつ虫の声きき秋はもうすぐ

県立尾道北高等学校一年 野田

耕平

中島

里彩

千尋

空に咲く大輪の花ながめつつ楽しき休みの終わりを思う

県立尾道北高等学校一年 大川 陽香

指先と櫛に絡んだ髪すいてポニーテールの夏が始まる 佐藤 みころ

左原市立東小学校一年 浅井 おるすばんれんしゅうしてるなつやすみすこしだけならできるきがする

石原 豊子 選

特 選

よるべなき御霊もあろうヒロシマの至る所に遺霊碑あれど

所に慰霊碑あれど」に表現された深みのある歌。 【評】ヒロシマの原爆で亡くなった方々へ寄せる想いが、下の句の

広島市

加土

道子

抗ガン剤治療始まる我が娘抜ける運命の髪を結いやる

広島市 山口 順子

が、下の句に表現されている切ない歌である。 【評】 癌治療を続けておられる娘さんへの親のやるせない気持ちと愛情

九十五の姉健やかを恃みとし今日山畑に大根を播く 【評】 九十五歳の高齢の元気な姉を思いやり、その元気さを「今日山畑に 世羅郡

世

羅 町

高本

澄江

大根を播く」と写実に表現しているところが良い。

24

ひと夜かけ窓の下まで来し蟬か足掻くかたちのままなる骸

福山市 若林美知恵

か」に作者の温かい思いが伝わる。【評】蟬の短い一生に思いを寄せる作者。「ひと夜かけ窓の下まで来し蟬

戦争の映像続く日々の中つばめは三羽の雛を育む

三原市 小白 照子

の営みを比較し、人間への警鐘を鳴らしている。【評】上の句と下の句で人間の愚かさと、燕など他の生き物の変わらぬ命

切り干しの封を開ければ陽の匂い祖母に抱かれし想いのすなる

待ちこがる今や遅しとほととぎす卯の花かげに亡き息子偲ばゆ

亡き義父が挿して増やせし紫陽花が今年も墓所を青くいろどる

クチナシの甘い香りに包まれて父の法要無事に終わりぬ

母の瞳は戦死の父を想うとき光届かぬ湖底を映す

ウクライナ人事でなし大国が家に土足で踏み入る恐怖

ハルビンを発つ夜の雨かかる日に逃げ場もあらず行列を組む

言葉なく荒れたる手指をわれに見せ妻はおもむろに厨に入る 尾道市

原民喜の「夏の花」とう文読みてギラギラの破片読み返すなり 「迫り」にゐる権力は何時も纏ひゐぬフェイク塗れの迷彩服を 広島市

尾道市 若住

呉市 石田

広島市 岡田

山県郡北広島町 出本 恵子

庄原市 古家八千代

三次市 林 章子

広島市 中垣 悦子

川 口 靖文

広島市 吉川 徳子

広島忌過ぎゆく時間語り継ぐ声なき声も枯らすことなく

被爆死の妻の髪留さがしあて十日の後に伯父も逝きたり

食べたいと胃瘻の夫に泣かれては乾いた口をゆっくりと拭く

千光寺の鐘ゆるやかに尾をひきて恙無き身のひと日が暮れる

施設にて兄と別るる時に言う「また来るね」今日納骨あとも

花曇り雑草の中ひっそりと小さきエビネ庭隅に咲く

蝉しぐれ空の色にも亡き人をしきりに想う八月を生く

ジャガ芋は雨の恵みを待ちまちて土盛り上がり命の息吹

清盛の納めしという経塚のいとも古りたり馬酔木花咲く 隠された行間の想ひよむごとく目と目で話すマスク会話は

広島市 松尾 信彦

三次市 堂本 明美

江田島市 住田 照水

呉市 田村美知子

尾道市 原田 道枝

広島市 東方田ナミ子

庄原市 松園 和子

有 材園 利司

広島市 兼池 隆子

広島市 森 ひなこ

市 齋藤 金二

廿日市市 齋藤 金二